

東紀州活性化大学の実験と実践

—地域活性化の方法論についての一考察—

安 食 和 宏

要旨 条件不利地域（過疎地域）の活性化はいかに図られるべきか、どうすれば実現可能なのかという点について、三重県南部の東紀州地域を対象として、若干の考察を試みた。東紀州では、1994年に設立された「東紀州地域活性化事業推進協議会」が主体となって、「東紀州活性化大学」といういわゆる人材育成事業が10年間行われてきた。10年にわたり、地元の若年層が自発的にこうした事業に多数参加してきたこと自体が注目すべきことであり、さらに「東紀州活性化大学」における熱心な活動と、その後の修了生たちの活発な活動もまた特筆すべきものである。本報告では、この「東紀州活性化大学」の10年間の活動記録と成果をまとめると共に、修了生たちの活動経過についても整理して提示した。結局のところ、この「東紀州活性化大学」は、受講生の情熱・積極性とカリキュラム編成の巧みさなどが作用して、生き生きとした人材育成を実現できた好例といえる。この場合は、市町村を越えて、異業種（職業）間の人材ネットワークが形成されたために、大きな成果をもたらすことができた。地域の活性化において、多様で個人的な人間同士の出会いがあり、ネットワークが作られることは、具体的なアクションを生み出す基本となるものである。そうした一連のプロセスを東紀州の実験的試みから読みとることができる。

1. はじめに

農山村地域の中でも特に都市部から離れた遠隔地に位置する地域（いわゆる条件不利地域、または過疎地域という呼称でとらえてもよい）では、一般的に、継続する人口減少や地域経済の停滞等を背景として、「村おこし」「まちづくり」、あるいは「地域活性化」などと称される多様な活動が展開されている。その内容は多岐にわたるが、その一つとして（あるいは全体に関わるものとして）、人材育成事業がある。「むらづくりは人づくり」という認識はかなり一般化しているものであり（森 1992）、「〇〇塾」「△△ゼミ」といった、集団で学び実践して地域の活性化につなげようとする試みが、各地で多数展開されている。森（1992）によると、全国的な組織としては、1990年に「21世紀村づくり塾」という財団法人が設立され、その下部組織として都道府県レベルの塾（農業農村活性化協議会）が全国で46作られた。同時に市町村レベルの塾として500以上の団体が発足している。

こうした人材育成事業においては、当然ながら一定のマニュアルがあるわけではなく、具体的な実践活動を通して、地域ごとに試行錯誤が図られているというのが実情であろう。本稿では、この人材育成を通して地域活性化を図るための方法論について、若干の考察を試みる。対象地域は三重県南部の東紀州地域であり、ここで過去10年間にわたって開設されてきた、そして筆者も丸9年間関わってきた「東紀州活性化大学」という事例を取り上げる。この「東紀州活性化大学」の足どりをここにまとめて記録すると共に、この具体的な事例を通してどういふ知見が得られるか、考えてみたい。

2. 東紀州活性化大学の開校まで

東紀州地域は三重県南部に位置し、行政的には、尾鷲市・熊野市・紀伊長島町・海山町・御浜町・紀宝町・紀和町・鵜殿村の8市町村から成る。南北に長い三重県にあって、人口が集積し経済活動が活発な都市部は県の北部に偏っており、一方南部は全体的に厳しい条件下にある。東紀州地域の面積は県全体の17.3%を占めるが、人口では4.9%を占めるにすぎない（総人口は90,539人、2000年国勢調査による）。この中で、農林統計上の農業地域類型区分による「中山間地域」に該当するのが鵜殿村以外の7町村であり、いわゆる「過疎法」（過疎地域自立促進特別措置法）により「過疎地域」の指定を受けているのが、紀伊長島町・海山町・熊野市・紀和町である。なお紀和町では、2000年国勢調査において全国一の高齢者率を記録した（53.5%）。

こうした東紀州地域の振興を図るために、1993年度に三重県は「東紀州地域活性化調査委員会」を設置し、調査・検討を重ね、その結果、「東紀州ふるさと・ふれあい交流圏の形成」を地域活性化のコンセプトとして提示した（寺口2003、熊崎2001）。そして活性化を図るための推進組織として、1994年5月には「東紀州地域活性化事業推進協議会」（以下、活性化協議会と略）が設立された。これは、県と地元市町村が職員と予算を出し合い、共同で運営に当たる組織であり、市町村の垣根を越えて東紀州全体の課題に取り組むというものである。活性化協議会の規約第2条では、「この協議会は、地域の自然・文化・産業等を活用した施策等を、三重県と連携しながら共同で推進し、もって本地域の活性化を図ることを目的とする。」とされており、その内容については、「この協議会は、第2条の目的を達成するため、次の事業を行う。1) 観光・レクリエーション・リゾート振興に関すること、2) 地域産業等の振興に関すること、3) 都市機能の充実、及び社会基盤整備の促進に関すること、4) 人材育成に関すること、5) 交通基盤の整備促進に関すること、6) その他、東紀州地域の活性化に関し協議会が必要と認めた事業。（同規約第4条）」と明記されている。そして、この活性化協議会が、発足以降特に力を入れて行ってきたのが、熊野古道伊勢路の発掘・整備・宣伝事業（これは2004年7月に世界遺産として登録された）と、これから述べる「東紀州活性化大学」（以下、活性化大学と略）である。

活性化大学は、以上のような経緯を経て構想が練られ、1994年10月の開校に至った。その設置要領第1では、「東紀州地域の特性を生かし、地域の創意と工夫に基づく個性豊かな地域づくりと産業振興を推進し、地域活性化の担い手となる意欲ある人材を育成するために東紀州活性化大学を設置する。」と記されている。そして、同要領第2の内容は以下の通りである。「大学は、第1の目的を達成するため、次の事業を行う。1) 地域づくり・産業振興に関する有識者及び実践活動家等による講義及び演習、2) 地域づくり・産業振興に関する実践方策の調査研究、3) 地域づくり・産業振興の推進事例等に関する視察研修、4) その他大学の目的達成に必要な事業。」ここに至って、東紀州地域独自の人材育成事業が本格的にスタートしたといえる。

3. 東紀州活性化大学の10年間の軌跡

活性化大学は、1994年10月の開校以来、1年を一つのサイクルとして、受講生の迎え入れと修了生の送り出しを繰り返しながら、2004年9月に至るまで、10年間継続されてきた。大

学の進め方全体に関わりながら指導助言（手伝い）を行う者としてコーディネーターが指名され、第1期においては、寺口瑞生氏（当時は松阪大学、現在は千里金蘭大学）がその立場にあった。そして第2期からは筆者も指名を受け、寺口氏と共に活性化大学の終了に至るまで9年間、コーディネーターとしてこの大学に直接関わってきた。以下では、こうした経験をふまえて、この10年間の活性化大学の歩みをまとめておきたい。

(1) 受講生について

活性化大学の対象者については、その実施要領の3で、「地域づくりと産業振興に意欲をもつ東紀州地域に在住あるいは勤務地を有している人を対象とし、人員は20人（これは後に30人に改められた）程度（45歳まで）とする。」と説明されている。この活性化大学は、当初から若年層を対象としていたわけであり、これまでの受講生について年齢構成をまとめたのが表1である。20歳代の人々が非常に多いのが特徴的であり、年度によって違いはあるが、合計で135人に達し（正確に言えば、この中には当時19歳の2名が含まれている）全体のほぼ半数を占める（48%）。一般的に過疎化・高齢化が進んでいるといわれるこの地域にあって、受講料が無料とはいえ、自主的な応募によりこれだけの若者が集まった（正直に言えば、メンバー集めのために自治体等のコネが活用されたことが若干あったが）のがまず特筆に値する。地元へ何らかのこだわりをもち、学びたい、活動したいという若者たちの潜在的なポテンシャルを表わすものともいえる。また修了生による口コミを通じて、その知人が次の活性化大学に応募してきたという例も多い。そして表2には、性別に受講生数をまとめて示した。毎年多くの女性が参加していた様子が理解できるが（全体の29%）、特に第7期では男性を上回っている。

次に、受講生の住所を市町村別にまとめたのが表3である。全体的には、人口規模に比例して、尾鷲市と熊野市からの参加者が多い（それぞれ、全体の29%、26%）。ただし重要なのは、東紀州の8市町村全てから参加者がみられる点であり、これは前述した活性化協議会の設立背景とその目的とも合致している。東紀州はそもそも面積的に大きく、特に尾鷲市と熊野市の間

表1. 受講生の年齢構成

年 齢	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	計
19～29	13	12	12	13	17	17	14	15	10	12	135
30～39	17	9	12	11	10	9	7	10	11	11	107
40～	7	7	4	7	5	5	3		1	1	40
計	37	28	28	31	32	31	24	25	22	24	282

単位は人、データは開講式時点のもの、東紀州地域活性化事業推進協議会の資料により筆者作成以下表4まで同様

表2. 受講生の性別構成

	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	計
男	30	21	23	23	18	22	11	19	14	19	200
女	7	7	5	8	14	9	13	6	8	5	82
計	37	28	28	31	32	31	24	25	22	24	282

表 3. 受講生の住所

住 所	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	計
紀伊長島町	1	2	2		2	2	2	6	1	2	20
海山町	6	3	1	1	3	1	1	1	2	4	23
尾鷲市	16	8	9	7	6	8	8	4	9	8	83
熊野市	7	8	8	11	5	9	7	6	5	6	72
御浜町	2	3	3	6	6	6	3	6	4	4	43
紀宝町	4	2	3	4	7	3		2	1		26
鵜殿村		1		1	2	2	1				7
紀和町	1	1	2	1	1		2				8
計	37	28	28	31	32	31	24	25	22	24	282

表 4. 受講生の職業

職 業	1期	2期	3期	4期	5期	6期	7期	8期	9期	10期	計
公務員	7	5	6	9	10	10	3	8	6	7	71
団体職員	7	6				2	3	3	4	2	29
会社員	8	7	11	5	8	13	7	7	8	6	80
自営業（農林漁業）	4	2	1		1		1		1		10
自営業（建設製造）	2	1	2	3		1	2	2	1	3	17
自営業（商業サービス）	3	2	8	5	6	2	2	2	4	2	36
その他	2	3		8	5	1	6	1		3	29
不明	4	2		1		1		1		1	10
計	37	28	28	31	32	31	24	25	22	24	282

注. 団体職員とは商工会や森林組合などに勤務している場合、その他とは、教員・保育士・住職・主婦などである。

には交通の難所とされた矢の川峠があり（国鉄の紀勢本線の開通が最も遅れた部分である）、尾鷲市を中心とする紀北地域と熊野市中心の紀南地域との交流は、そもそもあまり活発であったとはいえない。しかし、この活性化大学は、その境界を越えて、東紀州全体をとらえる場を提供したことになる。寺口（2003）の表現を借りれば、活性化大学は、二眼レフ構造をもつ地域に対して、生活圏を拡大する多様な交流を生み出し、新たな地域イメージの形成に成功したのである。

そして表4は、受講生の職業を示したものである。全体的には会社員と公務員が多いが（それぞれ、全体の28%、25%）、また同時に多様な自営業の人々もみられる（全体の22%）。これからも分かるように、活性化大学の一つの意義は、職種を超える異業種間の交流を生み出したこと、つまり職場または隣近所の人間関係とも異なる、新たな接触・交流の場を提供した点にある。それによって作られた人間のネットワークが、地域のいわゆる活性化という方向を目指して磨かれてきたのが活性化大学なのである。

(2) 1年間のスケジュール

前述したように、活性化大学の1年間は、10月の開講式に始まり、翌年9月の閉講式で終了

表 5. 東紀州活性化大学第 2 期生開講実績表

開講日	開講種別	テーマ	講師	備考
H 7.10.21	東紀州活性化大学開講式	元気な農村産業をめざして	モクモク専務 吉田 修	場所：県尾鷲庁舎 ・ガイダンス等
H 7.11.11	東紀州活性化大学第 1 回勉強会	東紀州の歴史	紀伊長島西小学校長 小倉 肇	場所：熊野市役所 ・一期生との交流
H 7.12.16	東紀州活性化大学第 2 回勉強会	美しい環境づくりをめざして	阿波町役場職員 井原まゆみ	場所：県尾鷲庁舎 ・意見交換会
H 8. 1.28	東紀州活性化大学第 3 回勉強会	外から見た東紀州	弘済出版社 次長 横田 薫	場所：御浜町ピネ ・意見交換会
H 8. 2.24	東紀州活性化大学第 4 回勉強会	印象革命	Y.NET 社長 宮内淑子	場所：県尾鷲庁舎 ・意見交換会
H 8. 3.16	東紀州活性化大学第 5 回勉強会	地域イベントのねらいと進め方	インタークロス研究所 会長 松井 渉	場所：県熊野庁舎 ・交流会等
H 8. 4.12	第 1 回自然ゼミ	テーマの検討		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 4.18	第 1 回情報ゼミ	テーマの検討		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 4.27 H 8. 4.28	第 1 回東紀州探険談義	紀南管内		
H 8. 4.28	東紀州活性化大学第 6 回勉強会	楽しい出会い、新しい発見	手づくりほいく研究会 代表 酒井妙子	場所：県熊野庁舎 ・交流会等
H 8. 5. 8	第 2 回情報ゼミ	テーマの検討		場所：県熊野庁舎
H 8. 5.17	第 2 回自然ゼミ	熊野古道とその周辺の植物	自然を考える会 代表 花尻 薫	場所：県熊野庁舎
H 8. 5.28	第 3 回情報ゼミ	テーマの検討		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 6. 2	第 2 回東紀州探険談義	紀北管内		
H 8. 6. 7	第 4 回情報ゼミ	情報発信について	百五経済研究所 調査役 西 孝	場所：県熊野庁舎 ・交流会等
H 8. 6.11	第 3 回自然ゼミ	現地踏査のスケジュール等について		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 6.13	先進地研修説明会 (沖縄班)	行程と研修の狙い		場所：県熊野庁舎
H 8. 6.16	第 4 回自然ゼミ	熊野古道現地踏査		馬越峠
H 8. 6.20	先進地研修説明会 (北海道班)	行程と研修の狙い		場所：県熊野庁舎
H 8. 6.21 H 8. 6.23	先進地研修	琉球文化歴史街道に行く		沖縄県恩納村他
H 8. 6.28 H 8. 6.30	先進地研修	「こだわり」のある特産品づくりに学ぶ		北海道岩内町他
H 8. 7. 7	第 5 回自然ゼミ	熊野古道現地踏査		横垣峠
H 8. 7.14	第 6 回自然ゼミ	熊野古道現地踏査		八鬼山

開講日	開 講 種 別	テ ー マ	講 師	備 考
H 8. 7.15	第 5 回情報ゼミ	テーマ協議		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 7.30	第 6 回情報ゼミ	成果品製作編集会議		場所：御浜町役場
H 8. 8. 8	第 7 回情報ゼミ	成果品製作編集会議		場所：尾鷲市役所
H 8. 8. 9	第 7 回自然ゼミ	熊野古道現地踏査に伴う中間まとめ		場所：御浜町役場
H 8. 8.18 H 8. 8.24	第 8 回自然ゼミ	熊野古道現地踏査		馬越峠
H 8. 8.26	第 9 回自然ゼミ	熊野古道現地踏査に伴うまとめ		場所：尾鷲市役所
H 8. 8.28	第 8 回情報ゼミ	成果品製作編集会議		場所：御浜町役場
H 8. 9. 2	第 10 回自然ゼミ	成果品製作作業		場所：県熊野庁舎
H 8. 9. 4	第 9 回情報ゼミ	成果品製作編集		場所：尾鷲市中央公民館
H 8. 9. 9	第 11 回自然ゼミ	成果品製作作業		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 9.12	第 10 回情報ゼミ	成果品製作編集		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 9.14	第 12 回自然ゼミ	成果品製作作業		場所：県熊野庁舎
H 8. 9.21	第 13 回自然ゼミ	成果品製作作業		場所：県尾鷲庁舎
H 8. 9.24	第 11 回情報ゼミ	成果品製作編集		場所：県熊野庁舎
H 8. 9.28	閉講式	成果発表		場所：県尾鷲庁舎

東紀州地域活性化事業推進協議会作成の資料より引用

する。この間のスケジュールについて検討してみよう。表 5 は、筆者が初めてコーディネーターとして参加した第 2 期（1995 年～1996 年）の、そして表 6 は最後の活性化大学となった第 10 期（2003 年～2004 年）の年間スケジュール（開講実績）を示したものである。両者ともに、基本的な流れは大きく変わらない。すなわち、10 月から翌年 3 月頃までは、地域づくり・活性化に関わる講師を招き話を聞いて学習するというスタイルが中心であり、その後半年間はメンバーが主体的に、地元を焦点を絞った調査活動に取り組むということになる。後者の内容については後述する。なお、第 2 期では自然ゼミと情報ゼミに分かれて活動がなされたが、第 10 期では全体が一つのグループとして活動したために、それが開講回数の違いを生んでいる（表 5、表 6）。

活性化大学のユニークさは、カリキュラムの中に各種のイベントを組み合わせ、「真面目さ」だけではなく、「面白さ・楽しさ」を強調し、またメンバーの自主性を引き出す工夫がなされてきた点にある。例えば、自分たちの地域を深く知る、情報を共有することを目的として、第 2 期では東紀州探検談義が 4 月と 6 月に実施されている。第 10 期の場合は 12 月に管内視察研修

表 6. 東紀州活性化大学第 10 期生開講実績

開講日	開講種別	テーマ	講師	備考
15.10.26(日)	東紀州活性化大学開講式 開講記念講演(一般課程)	「人と人のつながり を作り出す」 地域づくりの本質	吉備国際大学講師 鶴 理恵子	紀南県民局大会議 室
15.11.25(日)	活性化大学 第 2 回講演会(一般課程)	「東紀州の地域資源 としての自然、神話、 古道、祭り」	小倉 肇	紀北県民局 301 会 議室
15.12.13(土) ～12.14(日)	活性化大学 管内視察研修	速水林業 (FSC の 森)、田原屋、楠ヶ 崎、花の窟、千枚田、 さぎりの里		東紀州管内一円 湯ノ口温泉(紀和 町)
16. 1.28(水)	活性化大学講義(一般課 程)	「活性化大学で得た もの等」	活性化大学 OB (9 期生) 浜口芝男、市川茂昭	紀南県民局第 9 会 議室
16. 2.21(土)	活性化大学第 3 回講演会	「まちづくりの世界」	フリージャーナリスト 亀地 宏	紀北県民局大会議 室
16. 3. 4(木)	第 1 回勉強会(実践課程)	ゼミテーマの検討	コーディネーター 安食和宏	紀北県民局 301 会 議室
16. 3.23(水)	第 2 回勉強会(実践課程)	ゼミテーマの検討及 び選定	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	紀南県民局第 9 会 議室
16. 4. 9(金)	第 3 回勉強会(実践課程)	ゼミテーマの検討及 び選定	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	紀北県民局 301 会 議室
16. 4.23(金)	第 4 回勉強会(実践課程)	ゼミテーマの検討及 び選定	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	道の駅きのくに会 議室
16. 5. 7(金)	第 5 回勉強会(実践課程)	ゼミテーマの検討及 び選定	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	紀北県民局 301 会 議室
16. 5.21(金)	第 6 回勉強会(実践課程)	地元の食について 班構成について	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	道の駅きのくに会 議室
16. 6.11(金)	第 7 回勉強会(実践課程)	各班の調査の経過につ いて視察先の視察内容検討	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	道の駅きのくに会 議室
16. 6.25(金)	第 8 回勉強会(実践課程)	各班の調査の経過につ いて視察先の視察内容検討	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	道の駅きのくに会 議室
16. 7. 9(金)	第 9 回勉強会(実践課程)	各班の調査の経過につ いて視察先の視察内容検討	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	道の駅きのくに会 議室
16. 7.17(土) ～19(月)	先進地視察研修	ゆずの村馬路村の村 おこしについて 高知県の食について	コーディネーター 安食和宏	高知県馬路村
16. 7.28(水)	第10回勉強会(実践課程)	各班の調査の経過につ いて先進地視察レポート について	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	道の駅きのくに会 議室
16. 8.12(木)	第11回勉強会(実践課程)	各班の調査の経過につ いて成果品について	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	紀南県民局第 9 会 議室
16. 8.26(木)	第12回勉強会(実践課程)	成果品について	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	紀北県民局 201 会 議室
16. 9.16(木)	第13回勉強会(実践課程)	成果品について 閉講式について	コーディネーター 寺口瑞生、安食和宏	紀南県民局 5 F 会 議室 A
16. 9.25(土)	閉講式	成果発表		紀北県民局大会議 室

東紀州地域活性化事業推進協議会作成の資料より引用

が行われている。いずれも宿泊をはさんでおり、夜は夜鍋談義と称して、メンバー同士の親睦を図り、地域のことを様々な視点から考えるために宴会が長時間繰り広げられてきた。その他にも、メンバーたちの自主的な飲み会（あるいはキャンプなど）は数多い。これが実は活性化大学の一つの吸引力として作用してきたという側面がある。

また、例年6月から7月にかけて、先進地視察研修が実施されてきた。当初は事務局（活性化協議会）がほぼ段取りを決めて、各種の手配を行ってきたが、その後は、場所の選定から聞き取り相手など全てにわたり、受講生にできるだけ決めてもらって、準備についても任せるといった形態になった。そして各地で活躍しているユニークな市民グループと直接会って話を聞くこと（場合によっては懇親会を設けること）、また環境関連ならば自分たちも登山等を行って体験することなどが強調されるようになったために、ただの有名スポット巡りとは異なる、密度の濃い視察となってきた。第2期では沖縄と北海道、そして第10期では高知を訪問しており（表5、表6）、有意義な学習と体験が得られた。

(3) 受講生が取り組んだ調査・実践活動

1年間にわたる活性化大学の後半部は、受講生による自主的な調査活動に当てられきた。これは、自分たちの独自の視点で地元・東紀州の色々な資源を掘り起こすこと、見直すこと、情報の蓄積を図ること、そして活性化につながるような方向性を考えるという意図がこめられており、活性化大学の中心となる部分である。そのためまずは、各自の思うところ、こだわり、希望などを述べ合い、それらを集約しながら2つのグループ（ゼミ）に分けるということになる（前述のように10期のみは例外であった）。そして、2人のコーディネーターがいずれかのゼミを担当することになり、以後はメンバーによる討論、企画、調査（または体験など）、文章化といった段階を経て、最終的には報告書に仕上げ、9月の閉講式で成果報告を行うという流れである。

これまでのゼミ活動については、表7にまとめた通りである。このように、各年次の活性化大学が取り組んできたテーマは多岐にわたる。第4期・環境と健康ゼミの「河川水質調査」、第5期・自然ゼミの「海からみた東紀州」、第6期・自然ゼミの「風景と観天望気」、また第9期・水ゼミの「水に関わる調査」などは、東紀州の自然環境にこだわったものである。そして、伝統文化・芸能に焦点を絞ったものとして、第4期・東紀州のよさゼミの「食文化」、第6期・文化ゼミの「熊野芸術の創造（その内容は伝統工芸などである）」、また第7期・無形文化ゼミの「夏祭り」と郷土の味」、第10期の「東紀州の食を探る」がある。他には、熊野古道を中心としたもの（第2期、第8期）、独自の視点から東紀州の魅力を強調したもの（第3期、第5期、第7期、第8期）などがある。

これらはいずれも、自分たちが直接に調査や観察を行い（場合によっては熊野古道を歩いたり、船に乗ったり（写真1））、または地元の人から話を聞いたり、イベントに参加したり、色々と体験したり（料理を作る、また炭焼きを体験するなど）という活動をメンバーが分担しながら進められてきた。そしてこれらの成果は、カラー版報告書（総ページが100を超えるものもある）、またはマップとしてまとめられている。また成果の一部は、活性化協議会のホームページ上でも公開されている（<http://www.kassay.org/>）。こうした膨大な成果の蓄積は、東紀州がもつ多面的な魅力、豊富な地域資源を示すと同時に、これまでの活性化大学メンバーが注いだ情熱をも示すものである。表5、6に示したように、ゼミとしての活動はかなり頻繁になされて

表 7. 東紀州活性化大学各期のゼミ活動

年次	ゼミ名称 (担当者)	活動成果
1994～95 第1期	「まちおこし」ゼミ (寺口) 「産業おこし」ゼミ (寺口)	(各ゼミごとに討論が重ねられた。成果物としてはまとめられていない。)
1995～96 第2期	「自然」ゼミ (寺口) 「情報」ゼミ (安食)	・熊野古道マップ (カラー印刷) ・東紀州マップ
1996～97 第3期	「情報」ゼミ (寺口) 「産業」ゼミ (安食)	・東紀州あそびマップ (カラー冊子) ・元気人を探せ (冊子)
1997～98 第4期	「東紀州のよさ」ゼミ (寺口) 「環境と健康」ゼミ (安食)	・東紀州の食文化 (カラー冊子) ・東紀州 8 河川水質調査 (カラー冊子)
1998～99 第5期	「情報」ゼミ (寺口) 「自然」ゼミ (安食)	・知っとる東紀州 (カラー冊子) ・海からみた東紀州 (カラー冊子)
1999～2000 第6期	「自然」ゼミ (寺口) 「文化」ゼミ (安食)	・おすすめ風景と観天望気 (冊子) ・熊野芸術の創造 (カラー冊子) 他に合同で祭り用燈籠を作製
2000～01 第7期	「有形文化」ゼミ (寺口) 「無形文化」ゼミ (安食)	・テクンテクン：まちなみまわり (カラー冊子) ・東紀州夏祭りと郷土の味 (カラー冊子) 他に合同で祭り用燈籠を作製
2001～02 第8期	「熊野古道」ゼミ (寺口) 「こだわり東紀州」ゼミ (安食)	・熊野古道の楽しみ方 (カラー冊子) ・六感まで楽しめる東紀州 (カラー冊子)
2002～03 第9期	「東紀州 PR」ゼミ (寺口) 「東紀州の水」ゼミ (安食)	・「東紀州っていいかも」(カラー冊子) 他に体験ツアーの企画・実施 ・「水」(カラー冊子)
2003～04 第10期	合同ゼミ (寺口・安食)	・「東紀州の食を探る」(カラー冊子)

筆者作成

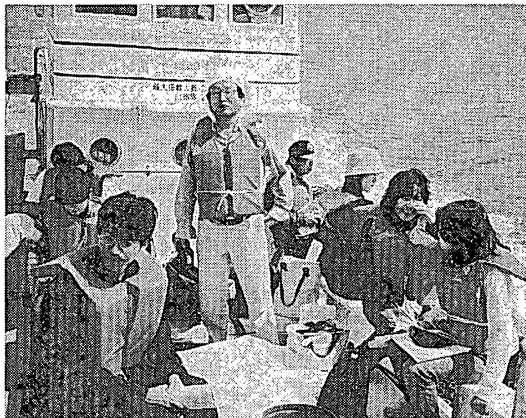


写真 1. 第5期・自然ゼミの「海からみた東紀州」調査



写真 2. 第6期生製作のジュゴン燈籠

おり、ミーティングは 10 回以上に及ぶ (より小さな自主的な打ち合わせなどを加えればその回数はさらに増える)。地元こだわりの活動ながら、活性化大学メンバーがいかに熱心に調査活動を行ってきたかが理解できる。

さらに、これまでの活性化大学の活動では、調査の枠を超えて、自分たちの実践に結びつけるといふ試みも幾つか進められてきた。例えば、第6期と第7期では、かなりの時間をかけて祭り用の燈籠を作製して、紀伊長島町の燈籠祭りに参加した (写真 2)。また、第9期・PR ゼミ

では、東紀州のよさを体験してもらうための若者向け体験ツアー「東紀州でワイワイ騒ごう」を企画して、自分たちで実現させた（これはテレビのニュースでも取り上げられた）。これらは手間のかかる作業ではあるが、実はこうした共同作業を通してメンバー同士の連帯感がさらに強められたともいえる。

4. 修了生たちの活動

(1) 地域づくり交流会と活性化大学 OB 会

これまで10年間にわたって活性化大学が輩出してきた修了生は、表8に示したように、のべ244名に達する。東紀州地域において、これだけ多数の20～40歳代の若者たちが活性化大学という場で学び活動したこと自体が、大きな成果である。

当初これらの修了生は、「すばる舎」「咲いた塾」などと命名された同期グループとして、それぞれ別個に独自の活動を行っていた。その後、修了生の縦のつながりと全体のまとまりを強化しようとする方向が考えられ、「地域づくり交流会」という形に結びついた。表9に示したよ

表 8. 東紀州活性化大学の修了生

第1期	36名修了「すばる舎」
第2期	19名修了「咲いた塾」
第3期	22名修了「元気塾」
第4期	27名修了「チームハース」
第5期	32名修了「しゃんがら」
第6期	31名修了「気長屋」
第7期	21名修了「しゃんしゃんみっこ」
第8期	25名修了「∞」
第9期	17名修了「めはりさんちゃんず」
第10期	14名修了「紀志団」

注. 「 」内は各修了生グループの名称
東紀州地域活性化事業推進協議会の資料より引用

表 9. 地域づくり交流会の開催実績

	日 時	場 所	参加者
第1回	1998年2月14日～15日	紀和町コミュニティセンターほか	約80名参加
第2回	1999年2月6日～7日	紀伊長島町、熊野灘レクリエーションホテルほか	約100名参加
第3回	2000年1月29日～30日	熊野市少年自然の家ほか	約150名参加
第4回	2001年1月20日～21日	尾鷲市せぎやまホールほか	
第5回	2002年1月26日～27日	海山町町民センターほか	約90名参加
第6回	2003年2月15日～16日	熊野市簡易保険保養センター	(OBのみ参加)
第7回	2004年2月29日	海山町老人福祉センター	(同上)約40名

注. 第6回と7回はOB会総会を兼ねる
筆者作成

うに、第1回の地域づくり交流会は1998年2月に紀和町で開かれた。これは、活性化大学の修了生のみならず、東紀州地域で活動している他の市民グループおよび奈良県・和歌山県のグループにも参加を呼びかけ、交流を図ろうとしたものである。この交流会は、各グループの活動紹介や、東紀州で実現可能なイベント等についてのグループ討論、夜鍋談義、そして現地見学会を含むものであり、2002年の第5回地域づくり交流会まで、活性化大学各期の修了生が交代で事務局をつとめて継続されてきた。100名近くの（場合によってはそれを超える）参加者を得て、地域のこと、活性化のことなどを話し合うこうしたイベントが実施されたのは、東紀州においては画期的なことであった。また、当時の修了生たちの行動力を示すものとして、2000年10月に「知事と語ろう未来の東紀州、東紀州活性化大学修了生の思い」をテーマとして実施された県知事との懇談会を紹介しておきたい。これは、県庁を訪問し知事と直接話し合いたいという修了生たちの発想・企画が実現したもので、当日は北川知事（当時）と修了生代表23名との活発な討論がなされた。

しかしその後、前述した地域づくり交流会のあり方を見直す議論がおこり、第6回（2003年）の交流会は、これまでと異なり、活性化大学修了生のみミーティングとなった。そしてこの場において、これまでの修了生グループを一本化した「東紀州活性化大学OB会」が正式に発足することとなった。当日承認された東紀州活性化大学OB会設置会則によると、その第1条では、「この会は東紀州活性化大学OB会と称する。会員相互の親睦と交流を図り、地域活性化のための事業等を行うことを目的とする。」と規定されている。また同会則第8条では、「本会は会の目的達成のために次の事業を行う。1) 会員相互の親睦・連携・交流を深めるための事業、2) 地域活性化のための各種事業、3) その他第1条の目的を達成するために必要な事業」とされている。

以上からもわかるように、このOB会は、全体がまとまって何らかの事業を積極的に推進するというよりも、メンバー同士を結びつけるための比較的緩い組織である。時間の経過とともに少しずつ弱まっていくことが避けられない修了生のネットワークをある程度維持したいという思惑が読みとれる。そして第2回のOB会総会は、2004年2月に開かれ、この時は東紀州の素材を生かした創作料理コンテストが行われている（写真3）。

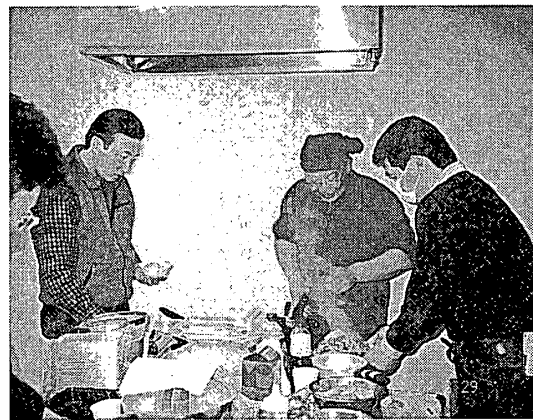


写真3. 創作料理づくり

(2) 新しいNPO法人、グループの誕生

上記(1)で述べた活性化大学OB会は、修了生全体を束ねて結びつける組織ではあるが、それが一団体として頻繁に具体的なアクションを起こしているわけではない。むしろ、活性化大学を通して知り合ったメンバー同士が、こうした新たな人間のネットワークを生かして、それぞれの方向性ごとにグループを組織して、色々な活動を始めるようになったという状況である。これは今までの東紀州ではあまり見られなかった試みである。以下、具体的な事例をいくつか紹介しよう。

第一は、2000年7月にNPO法人（特定非営利活動法人）として認証された「まちづくりセンター・Theくまの」である。これは、熊野市を中心とした紀南地域においてまちづくりに

関わる様々な活動の企画・運営や地域情報の受発信に携わってきた。そして行政と民間とのパイプ役をも果たしてきた（寺口 2003）。例えば、毎年3月に（1998年から2004年まで）七里御浜を会場として開催されてきたイベント「じゃりんピック」の事務局はこの「The くまの」が担ってきたし、また事務局主催のパソコン教室なども開かれてきた。この「The くまの」の理事長 N 氏をはじめ、中心的メンバーとして活動している人の多くが、活性化大学の修了生である。

第二の事例は、同じく NPO 法人として 2004 年 2 月に認証された「東紀州 IT コミュニティ」である。ここが運営しているホームページ「東紀州ほっとネット・くまどこ」（<http://kumadoco.net/>）によると、その設立の趣旨は、「地域ポータルサイトの運営や地域住民への IT 研修等の活動を通して、東紀州地域の豊かな社会づくりに寄与し、地域住民が多様な情報交流を行い、新しいコミュニティの創造が図れるよう活動を推進していきたい（表現は一部省略）」とされている。これは、三重県が力を入れて進めてきた東紀州地域の情報インフラの整備推進とも対応した活動であり、この NPO 法人では、理事長 M 氏（紀伊長島町）ほかほとんどの理事が活性化大学の修了生メンバーである。なお、上記ホームページの内容は非常に充実しており、毎日更新される情報により、東紀州の最新の動きを知ることができる。

第三の事例として、尾鷲市で活動しているグループ「ネイバーガーデン」を紹介しておきたい。これは、活性化大学修了生 H 氏が中心となって構想が練られ、2002 年 6 月にスタートした新しい形態のグループである。その活動拠点は尾鷲市の元木材市場事務所であり、ここでは、毎週末の夜「ネバガカフェ」が開かれる。そもそも「ネイバーガーデン」は、様々な社会活動に関わっている人、また関わりたい人たちのコミュニケーションの場づくりを目指しており、誰もが気軽に立ち寄ることができ、そこから新しい活動が広がっていくことを意図して、このカフェが開かれている。こうした新しい試みを手がけている「ネイバーガーデン」の中核メンバーのほとんどは、活性化大学の修了生である。またカフェ以外の活動としては、自主的な映画上映会などイベントの企画・運営もある。これらの活動内容についてはそのホームページでも紹介されている（<http://www.neighbor-g.net/>）。

以上のように、東紀州地域では、活性化大学を経験した若いメンバーが中心となって、新たなグループが作られ、これまでになかったような発想と活動がみられるようになってきた。こうしたアクションが生まれる一つのきっかけを作り、またその基本となる人間関係を築いてきたという点で、活性化大学の果たしてきた役割が評価されてもよいと思われる。

(3) 多彩なイベントの実施

次に、活性化大学修了生たちが中心となって、その企画が練られ実施されてきた新しいイベントの事例を紹介する。第一に、「熊野古道仮装ウォーク」がある。これは、第 1 回地域づくり交流会（1998 年 2 月）において提案されたまちづくりに関わるアイデアの中で優秀賞を受賞した「熊野古道仮装マラソン」がその基本となっている。その後、第 3 回・第 4 回地域づくり交流会において、グループワークの一つのテーマとして取り上げられ、その実施形態について議論され、2001 年に第 1 回の「熊野古道仮装ウォーク」が実施されることとなった。これは、かつて熊野詣でを行った参詣者たちの巡礼衣装を身につけ熊野古道を歩こうというイベントであり、活性化協議会がその事務局をつとめ、活性化大学の OB が積極的に関わりながら、これまですでに 5 回実施されている。

第二の事例が、「サバイバルキャンプ」である。これは、第2回～第4回地域づくり交流会において実現可能なイベントの一つとして取り上げられ、具体的に議論されて、実現に至ったものである。2001年8月の第1回サバイバルキャンプ以来、毎年夏に実施され、その回数はすでに4回を数えている。これは、人里離れた河川の上流部など、自然に直接関わる可以选择する場所を選び、親子で1泊2日のキャンプを体験し、自然の資源の生かし方、道具の使い方、自然観察の方法などを学ぼうという企画であり、活性化大学OBがその運営に協力してきた。

第三の事例は、「海渡り探検隊」である。これは、活性化大学・第5期生「自然ゼミ」が「海からみた東紀州」というテーマで調べたことを基本として、上記事例と同様に、地域づくり交流会での議論を経て実施に移された。このイベントが実施されたのは2回のみ（2000年と2001年）であったが、1泊2日で船をチャーターして熊野灘を巡り、無人島でキャンプを張って、東紀州の海と自然を深く体験するというかなり意欲的な企画であった。

以上のように、活性化大学修了生たちが企画して実現させた新しいイベントは多様である。これらは、活性化大学在学中に地元こだわって調査・学習を重ねたことが活かされた結果ともいえよう。

5. 若干の考察—むすびに代えて—

以上、三重県東紀州地域において10年間開かれてきた活性化大学について、および修了生たちの活動について説明してきた。最後に、この活性化大学の意義というものについて、改めて検討したい。活性化大学が当初目指したのは、地域活性化を図るための人材育成である。しかし、これまでの経過と自分の経験をふまえてみると、この活性化大学に関しては、人材を「育成」というよりも、これまでばらばらに活動していた、またはあまり表に出てこなかった個性的な人々を結びつけて、人材のネットワークを形成したということが大きいといえる。それは8市町村という広域にわたるネットワークであるために、東紀州全体をとらえる視点が共有された、また異業種（職業）間のネットワークであるために、多様な人間同士がぶつかり磨かれてより魅力的な人間関係が築かれたともいえよう。そしてこうしたネットワークと連帯感が、活性化大学における、または修了後の色々なアクションを生み出す基となっていることが明らかである。

活性化大学がこうした大きな成果をおさめることができた要因は、どのようにまとめられるだろうか。まず何といても、人材に恵まれたということである。停滞・衰退のイメージで語られることが多い東紀州において、これだけ活力のある多彩な若者たちが活性化大学に継続して参加したこと自体が、筆者にとっては驚きであった。そして、活性化大学を運営してきた活性化協議会のサポート体制が優れていたという点も指摘できる。また前述したように、メンバーの主体性と連帯感をひきだすようなカリキュラム上の工夫がみられた。大学での活動は徹底的に地元・東紀州にこだわったものであり、ほかの真似をするのではなく、地元の良さ・面白さを肯定的にとらえて追求してみようという方向性も良かったと思う。いわば「ないものねだりはしない」「あるもの探しから始めよう」という姿勢である。そして最後に、活性化大学全体を通して図られてきた「雰囲気」づくりである。活性化というものを「義務・責任」としてとらえるのではなく、「楽しさ・面白さ」を大事にすること、「自分たちが楽しむのが大事」という発想は、これまでの活性化大学の基本にあったものであり、こうした緩やかなとらえ方もま

た重要と思われる。

ここで述べた活性化大学のやり方を、他の地域にもそのまま応用するのは困難かもしれないが、この事例は、地域活性化の方法論を考える上で一つの方向性を示すものである。多様な人々が出会い、人間のネットワークが作られ、それが具体的なアクションを生み出していく、それによってまた人々の動きが活発になり、より生き生きとした面白い地域づくりへと結びつく、そうした一連のプロセスを、東紀州のこの実験的試みから読みとることができるからである。

なお、東紀州においては、より実践的な人材育成を目ざした「東紀州活性化大学院」が2002年12月に開校され、現在第3期目を迎えている。本稿では詳しく触れられなかったが、こうした新たな動向もふまえて、今後の東紀州の動きに注目していきたいと思う。

謝辞

多くの新鮮な刺激を与えてくれた、そして筆者の東紀州通いを駆り立ててくれた、これまでの活性化大学メンバーの皆さんに、この場をかりて御礼申し上げます。そして、活性化協議会の歴代のスタッフ、寺口瑞生先生にもこれまでに大変お世話になりました。また、現活性化協議会の方々には資料収集等で便宜を図っていただきました。以上の方々にあつく御礼申し上げます。

参考文献

- 安食和宏（1996）：紀伊半島の中の東紀州を考える。「あすの三重」、101、p.65-71。
安食和宏（2001）：三重県東紀州地域の活性化事業について－熊野古道と活性化大学を中心に－（発表要旨）。「経済地理学年報」、47-4、p.125-126。
熊崎圭介（2001）：熊野古道を活用したみえ東紀州地域の振興。「地域開発」、447、p.17-21。
寺口瑞生（1996）：市町村の明日を考える。「あすの三重」、100、p.11-17。
寺口瑞生（2003）：過疎からのブレークスルー－観光と環境を取り入れた地域づくり－。古川彰・松田素二編『シリーズ環境社会学4：観光と環境の社会学』新曜社、p.246-258。
三重県知事公室政策課編（1994）：『東紀州地域活性化調査報告書（東紀州ふるさと・ふれあい交流圏の形成）－概要版－』、三重県。
森 巖夫（1992）：『地域おこし最前線』、家の光協会。